



脱原はりま通信

ひとりひとりの小さな命を大切にする社会、持続可能な社会を目指します

脱原発 はりまアクション

連絡先

菅野 個人電話 079-421-2853

菅野 Email hssss461@yahoo.co.jp

No. 0118

2021. 3. 5 発行

福島原発事故被害者の方の声に耳を傾けて！

福島の原発事故から10年が経過しました。人々の記憶から薄れてしまいそうですが、75年前に広島、長崎に落とされた原爆と同じように、私達の記憶に残して、後世に伝えていかなければならないと思います。

原発事故後の放射能からの避難者、原発事故被害者のを紹介します。

ふるさとを奪った原発

Kさん 「放射線量20 (mSv/年) (年間20ミリシーベルト) までは大丈夫だ」と避難解除された地域は、商店街もなく、車で買い物に行っている。ふるさとに戻ってくるのは、車を運転できるくらいの元気なお年寄りか、原発関係の作業員だけ。原発事故被害者は「ふるさとの喪失感」を持っています。



阿武隈高地の春

Aさん みなみそうま おだか 南相馬市小高地区には4校の小学校があったが、児童が激減のため一つの校舎にまとめられた。



福島原発事故後の浪江町津島地区 ここに生きた証しがある地域の中に子供の姿が見えない。地域のコミュニティも崩れた。

ふるさとに戻りたいけど、戻っても誰もいない。じゃあ、戻っても仕方がないなあ。これがふるさとを失うってことです。避難者は、平均で6、7回も避難場所を転々、そういうことの繰り返しで、多い人は30回を超えている。現在、2,278人が震災関連死している。転居を繰り返す事により緊張と不安というストレスを抱え、なかなか進まない復興に絶望し、自死者も数多く含まれている。

Oさん マスコミ報道もなくなり、福島の復興は進んでいると思われている。しかし、現状はバリケードが張られ、草が伸び、家のガラスは割れ、時間が止まったままとっている。除染した土は農業廃業に追い込まれた農家の土地に置かれ、その量は計り知れない。

Tさん 親は地元に残るも収入はなく、わずかな賠償金では今までと同じ家や生活は到底取り戻せない。低賃金のため親を呼びたくてもできない。6畳の部屋で隣とは壁1枚。隣の家族の声が丸聞こえの生活を余儀なくされる。故郷に戻りたくても戻れない。避難先での人間関係や絶望感といったことが、「最悪の物語」として心に刻まれていく。



民家の近くに置かれた除染土 放射能は漏れない？

福島に多い白血病・子供の甲状腺がん

各都道府県の国公立医師会によると、昨年4月から10月にかけて「白血病」と診断された患者数が、一昨年の7倍にのぼったことが判明しました。患者の80%が東北・関東で、福島県が最も多いのです。

また、子供の「甲状腺がん」は10万人に一人しかならない病気です。ところが、福島では、原発事故当時18歳未満だった人約30万人のうち、甲状腺がんになって摘出手術した人は200名以上になっています。

子どもを人柱にして「復興五輪」

「復興五輪」と称して、福島県から聖火リレーをスタートする計画があります。聖火リレー予定地周辺の放射線量は、法律で定められている基準値を大きく超えています。「コースランナーに防護服を着用させるべき」「遠方からの大勢の観客を動員してはいけない」「子供や若い女性を沿道に並べて復興の人柱にするな」と地元の方の声があがっています。

福島原発の近くの最も放射能汚染されていた地域で聖火リレーをしたいために、JR常磐線が全線開通しました。しかし常磐自動車道を少し北上すると単車は走行禁止、十数キロ先から車外に出られない、窓も開けられない。このような、放射能基準値をはるかに超えた所で常磐線を走らせ、聖火リレーをしようとしています。

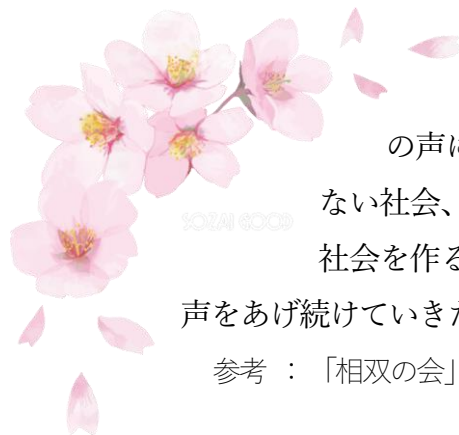


東京五輪聖火リレーのための復興か？

安全神話を信じ込まされ

日本には、^{はいろ}廃炉が決まったものも含めて原発が54基もあります。世界で原発保有国第3位です。地震大国の日本に54基もの原発があるのは異常なことです。兵庫県の近くでは、福井県に、廃炉決定の「もんじゅ」、「ふげん」、^{つるが}敦賀1号機、^{おおい}大飯1、2号機、^{みはま}美浜1、2号機を含めて15基の原発があり、そのうち3基は40年以上の老朽化した原発です。安全神話を信じこまされ、国民の無知、無関心をいいことに、多くの原発を作ってしまいました。

政府や東電は、福島の原発事故は「想定外」として原発事故がなかったかのように、責任もとらず、被害の実態もまったく理解しようとしません。この事に被害者の方はより一層苦しめられています。



福島原発事故の被害者の方に声を傾け、原発のない社会、安心して暮らせる社会を作るために原発反対の声をあげ続けていきたいです。 I.F.

参考：「相双の会」会報誌(2019年度)